

異文化講演会報告

昔を「話す」か、「語る」か。
—「聴く」姿勢を育てる幼小接続教育の試み—

第36回講演会

2019年11月27日に人文学部異文化交流研究施設主催の講演会を開催し、関西福祉科学大学教授（現武庫川女子大学教授）の高木史人先生に上記の演題でご講演いただきました。ご専門は国語教育、口承文芸研究、方言研究、日本文学と多岐にわたっておられますが、この度はとくに昔話・民間伝承についてお話をいただきたくお招きしました。

ご講演では、折口信夫と三谷榮一の「語る」と「話す」に関する論を検討し、柳田國男の「昔話」論を批判的に分析されました。また、「相槌」が「聴く」ことのできる子どもが育つという効用があるということを指摘されました。本講演の内容を基にご執筆いただいた論文が『異文化研究』第14号（山口大学人文学部異文化交流研究施設、2020年3月刊行）に掲載されておりますので、どうぞご覧ください。

高木先生ご自身の「語り」も絶妙で、長年のフィールドワークで得られた様々な知見を披露しながらの「お話」に我々はすっかり引き込まれ、あっという間に時間が過ぎてしまいました。質疑応答においても、どの質問にも深い見識をもって丁寧にお答えいただき、最後まできわめて充実した講演会となりました。

（報告者：武本 雅嗣）



村上春樹と架空の作家ハートフィールド

第37回講演会

2020年は新型コロナウイルスの関係で、海外でも国内でも大学に講師を迎え、また市民の方々を招いて講演会を実施できる状況にありませんでした。そこで人文学部は、恒例の講演会の方法は断念し、視点を変えて、2020年12月20日に遠隔講演会に初めて挑戦することになりました。

講師を務めたのは2020年3月に定年退職を迎えられた日本文学がご専門の平野芳信山口大学名誉教授でした。コメンテーターには、同じく村上春樹研究をご専門にされている本学国際総合科学部の仁平千香子先生にお願いしました。

講演は、平野先生のライフワークである村上春樹文学の研究活動をまとめる内容になりました。春樹は、デビュー作『風の歌を聴け』（1979）において自身を語り手として作中に登場させ、自らがもっとも影響を受けた作家は米作家のデレク・ハートフィールドだと断言させます。しかしこの米作家は実在する作家ではありません。春樹がアメリカ文学から受けた強い影響に関しては、批評家からしばしば指摘されるところですが、ここで注目すべきは、作家村上春樹の起源ともなる米作家が本人が捏造した作家であるということです。

ご講演で平野先生は、この架空の作家を巡る興味深い背景を明らかにされました。特にハートフィールドのモデルの解明に焦点を当て、春樹が京都東山で僧侶だった祖父について近年発表したエッセイから推測できることをについて詳しいお話がありました。平野教授が何年も前から資料を集め、研究を続けてきたハートフィールドと祖父との関係を裏付ける様々な証拠が紹介されました。ご退職後も春樹研究に取り組む先生の意欲が鮮明に伝わるとご講演となりました。

オンラインの参加者は84名で、国内外から数多くの質問やコメントをいただきました。仁平先生のコメントも含めて大変刺激的な講演会となりました。ご講演の原稿は本学部の学術雑誌『異文化交流研究』vol.15に載せられ、オンデマンド配信もされています。そちらもご覧になれます（リンク<https://www.youtube.com/watch?v=ZJ4Sh9KqjEI>）。

（報告者：エムデ・フランツ）



発行

山口大学人文学部異文化交流研究施設

753-8540 山口市吉田 1677-1 TEL 083-933-5200(代) FAX 083-933-5273

<http://www.hmt.yamaguchi-u.ac.jp>

2021年8月1日